

ダイコン新品種『来夏』 の導入事例

～気候等の環境変動の中での安定した収量と品質を求めて～

大樹町農業協同組合
農産部 農産販売課
高橋 将史

大樹町は十勝の南（帯広市から約60km南）に位置し、東は太平洋、西は日高山脈に接し中央部は広大な十勝平野が広がる、酪農が農業の基幹となっている農村地帯です。気象条件は、太平洋沿岸であるため帯広市周辺の内陸地方と比べ気温は低く、特に初夏から夏にかけて太平洋からの海霧の影響を受け冷涼な気候となっています。

農用地の面積は約14,600haで、そのうち約12,400haが酪農向けの草地飼料畑、残り約2,200haが小麦、甜菜、馬鈴薯等の畑作物と冷涼な気候を好むダイコン、キャベツ、ブロッコリーを主とした野菜の栽培となっています。

ダイコン栽培は昭和58年から20年以上の歴史があり、現在の作付け農家（農業法人含む）は11戸、面積は約60haと最盛期より栽培戸数、面積も減少していますが、近年は安定した作付け状況で推移しています。

ダイコンの栽培時期は5月上旬～8月上旬に播種し、8月上旬～10月まで出荷しています。ここ数年5月～8月の不安定な気候が続いていることから、これらの環境下でも栽培可能な安定した品種を選定するため試験栽培を実施しています。平成15年から試験導入した『来夏』は、6月～7月播種の試験栽培で安定した結果が得られた

ことから、限定的な拡大試験を経て、昨年からは本格的な町内各地区での拡大試験に入りました。

昨年の天候は6月～7月上旬の低温により、野菜を含め農作物全般で生育不良、停滞が発生し、ダイコンに至っては播種から出荷まで65～70日（通常夏季生育日数は55日程度）前後の日数となり内部品質の劣化等も発生しました。また低温から一転して7月下旬～8月中旬にかけては高温が続き、大変厳しい状況でしたが、『来夏』を栽培した生産者からは良い品質のダイコンが出荷され、本年からの導入を決定しました。



▲『来夏』栽培風景

本年の大樹町での『来夏』の播種時期は6月中旬～7月上旬で6haを作付け、各農家への栽培技術の確認をおこなった後、現在の品種から段階的に切り替えをおこなう予定です。今年の北海道は日本海側から内陸部にかけて春から深刻な早魃が発生していましたが、大樹町では早魃の影響は少なく、良好な栽培環境で7月上旬まで推移しました。しかし、7月中旬の10℃を切る低温、8月に入ってから早魃、異常高温の影響から品質を維持し出荷するのは厳しい状況となりました。この中で『来夏』については、通常より根長がやや短く、肉付もやや細めに仕上がっているものの品質、歩留まりともに良い状況で出荷されています。



▲ バランス良い草勢で生育の揃い良好

近年は地球温暖化の影響から初夏の低温、盛夏の高温日数増加や早魃、海霧発生減少等、異常気象と言われる状況もある中で、国産「安心安全」の消費者からの要望の高まりもあり、今後とも栽培農家の安定収入の確保と産地として生き残るための模索は続けていく考えです。



▲ 集荷場へのコンテナ出荷



▲ 根形の揃いよく肌がきれいで高品質



▲ 夏ダイコンとして道外へ出荷